

日蓮大聖人御書全集

ないきのさこんにゆうどうどのごへんじ

内記左近入道殿御返事

新版
2136
ゝ
2137

ないきのさこんにゆうどうどのごへんじ

内記左近入道殿御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

ないきのさこん

弘安5年('82)

1月14日

61歳

内記左近

はる

はじ

おんよろこ

じたもう

こ

そうら

お

春の始めの御悦び、自他申し籠め候い了わんぬ。

こぞ

らいりん

どんげ

ゆめ

まぼろし

そもそも、去年の来臨は曇華のごとし。はたまた夢か幻

うたが

は

そうろう

ことし

はじ

しんざん

か、疑いまだ晴れず候ところに、今年の始め、深山の

すみか

せつちゆう

むろ

たこく

へ

おんつか

やまじ

踏

分

栖、雪中の室へ、多国を経ての御使い、山路をふみわけ

そうろう

こぞ

真

られて候にこそ、去年のことはまことなりけるや、まこ

驚

おぼ

そうら

たぎよう

しさい

えちごこうの

となりけるやと、おどろき覚え候え。他行の子細、越後公

ごぼう

おん

文

もう

そうろう

きようきようきんげん

御房の御ふみに申し候か。恐々謹言。

しょうがつじゅうよつか

正月十四日

にちれん

日蓮

かおう

花押

ないきのさこんにゆうどうどのごへんじ

内記左近入道殿御返事

おもう

追つて申す。御器のことは越後公御房申し候べし。

おんこころ

深

よし

うつぶさ

もう

たま

そうら

御心ざしのふかき由、内房へ申させ給い候え。